

§ 2.11 SCE ネットとインターネット

宮木 宏尚（監査人・元幹事）

1. はじめに

SCE・Net が計画された 1999 年末～2000 年は、WINDOWS 95 が発売され I T 元年と言われる 1995 年から急激に普及し始めたインターネット、E メールが最も注目された時期であった。また、丁度 I T 分野では 2000 年問題で大騒ぎをしていた時期であった。

従って、SCE・Net の計画もこの流れを先取りする形で進むこととなった。

コンサルティングを主要業務とする SCE・Net は、概ね図 1 のように構成され、「SCE・Net は化学工学会に属するシニアの技術者・科学者 – 専門分野で多くの経験を持った人達 – をインターネット上で組織し、法人会員の依頼に応じて選任された最適な技術者・科学者が問題解決の方策を検討し、法人会員に対して検討報告書として作成・提供します。」と発足に際しての案内書（2000 年 3 月）記述されているように、インターネットと E-メールを利用することを前提に計画された。

つまり SCE・Net の“ネット”は、シニアの技術者・科学者のネットワークとインターネットの 2 つのネットを掛けたものになっている。

2. ホームページの開設

従って、SCE・Net のスタートに当っては、当初からホームページの制作が計画され、2000 年 4 月の発足後早急に完成させることが要求された。

最初のホームページは、ホームページというよりはグループウェアというべきものであり、会員間のコミュニケーションを目的とし、簡単な「掲示板」機能を中心とする構成で制作することが計画されたが、この時期に I T ベンチャー企業である（株）ビューテックラボ（以下 B L C 社）で開発されたサイバーコンサルティングシステム「ビレナジ B2C（Village of Knowledge B2C）」が SCE・Net の業務に安価（初期費用 3 万円、運用費用 3 万円／月）にそのまま利用できることが分り、このシステムをとり入れたホームページを立ち上げることとなった。

「ビレナジ B2C」は、コンサルティング案件ごとに、セキュリティを確保されたバーチャルな「コンサルティング・ルーム」を開設し、コンサル業務を行えるように設計されており、医療相談、投資相談、法律相談など様々なコンサルティング業務に活用されていた。

SCE・Net では、当面個人会員 100 名、法人会員 50 社を想定し、150 ルームのシステムを利用することとした。

図 1 SCE・Net の構図

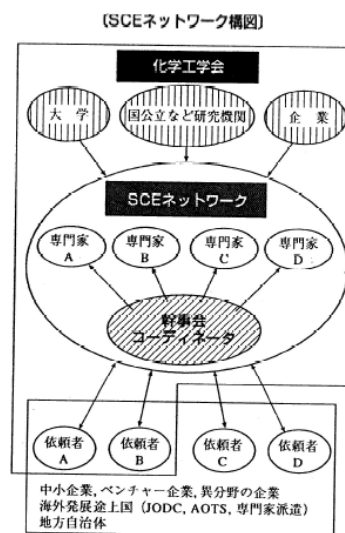
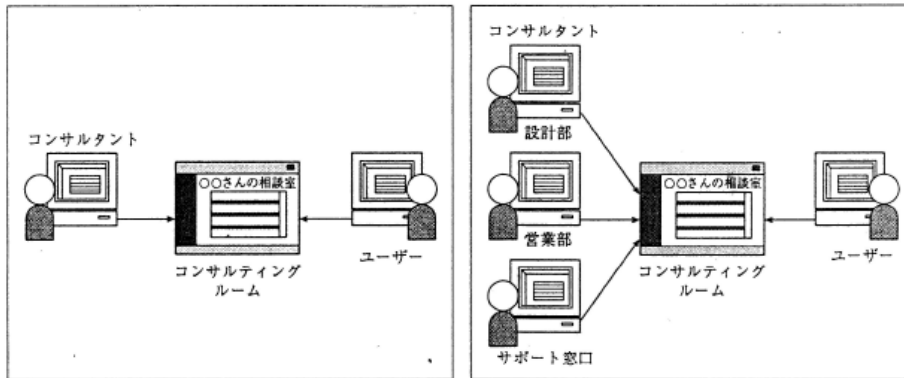


図2 ビレナジ B2C イメージ図



このようにして、2000年5月末に開設された初期のホームページでは、次の機能が盛り込まれた。

- ① グループ掲示板（幹事会、全会員、環境、安全、生産改善 など）
- ② コンサルティングの申込み
- ③ 会員名簿
- ④ コンサルティング・ルーム

図3 初期のホームページ トップ画面

SCE・Net
(シニアケミカルエンジニアズネットワーク)

グループ掲示板

| 幹事会 | 全 員 | 環境問題 | 安全対策 | 基準・規格
| 生産改善 |

| 設備改善 | 技術開発 | シミュレーション | 補助事業 |

コンサルティング申込み

| 初めてお申込み頂く方 | 既に登録がお済みの方 |

会員名簿

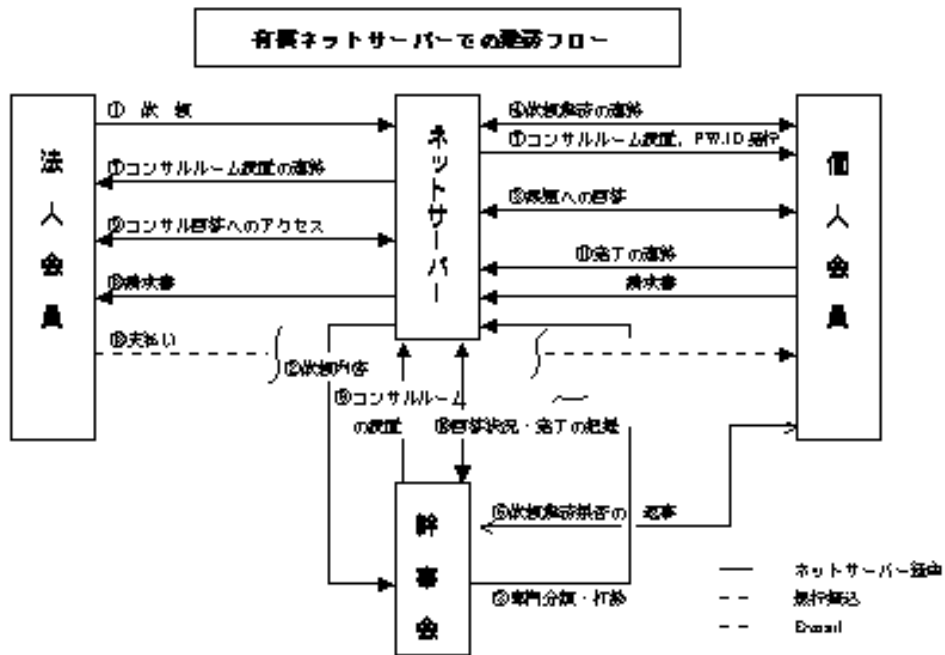
| 法人会員名簿 | 個人会員名簿 |

コンサルティングルーム

| ルームにログインする |

このホームページにより、コンサルティング業務は、概ね図4の手順で行われることとなった。

図4 コンサルティング業務フロー



3. 第1次改造（2001年秋～2002年春）

このようにしてホームページを利用した活動が開始され1年半ほど経った2001年秋、システムのフォローアップを行った。ここで指摘された課題は次のようなものだった。

課題1：ホームページ経由のコミュニケーションが進まない。

この時期は世の中のIT化が急速に進んだと言うものの、Eメールでの通信を除けば定期的にホームページを閲覧するという習慣を持つ人は少なく、特にシニア層ではこれが顕著で、掲示板に掲載しても読まれない情報が多く、これが悪循環となり掲示板がコミュニケーション・ツールとして機能していなかった。また、この時期IDとパスワードを使ってアクセスすることへの煩わしさを嫌う傾向もあった。

課題2：「法人用有料コンサルティング・ルーム」が活用されない

当初計画した法人会員50社の入会が進まず、コンサルティング案件も少なく、コンサル・ルームの開設がなかなか実現しなかった。また一方で学会活動として1対1の有償コンサルを行う場を提供することへの懸念も指摘された。

課題3：SCE・Net関連情報が、SCE・Netと学会ホームページとに分かれて掲載されている。

以上の課題を予算の許す範囲で解決するため、2001年度末までに、次のような対策を実施した。

(1) 情報伝達を「Pull型」から「Push型」へ

これまで掲示板を見に行かないと情報が得られなかったのを、掲示板に新たな書き込みがあった時点で、「書き込みがあったことのお知らせ」と「書き込みタイトル」の2点を、自動的にEメールでメンバーに通知するシステムを開発し、使用に供した。

(2) 「法人用有料コンサルティング・ルーム」の一次閉鎖

法人用有料コンサルティング・ルームはSCE・Netの一つの売り物ではあったが、活用場面が少ないことから当面利用しないこととし、法人／個人会員間でコンサルティング契約が成立した以降の情報交換は、主としてEメールで行うこととした。

なお、このことにより運用費を3万円／月から1.5万円／月に減額してもらった。

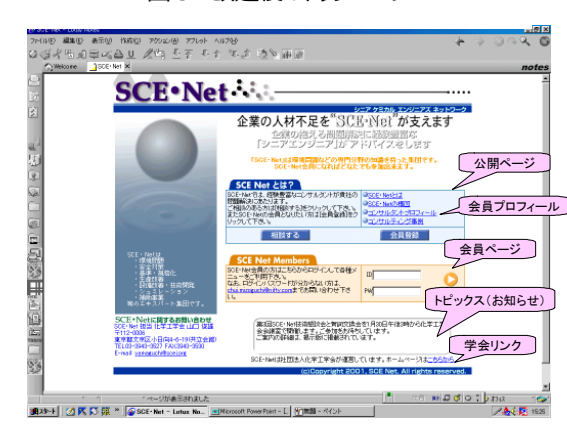
(3) 学会ホームページにある関連情報のSCE・Netホームページへの移設

SCE・Net規約など学会ホームページに掲載されていた関連情報を、SCE・Netホームページに集約するとともに、学会ホームページとのリンクを強化するなど、ホームページの一元化を図った。

(4) その他の改善点

- ① トップページデザインを充実した。
- ② 一般公開ページを充実し、会員専用ページとを明確に区分した。
- ③ 「トピックス（お知らせ）」掲載コーナーを新設した。
- ④ 公開用会員プロフィールを掲載した。

図5 改造後のトップページ



⑤ 法人会員の匿名投稿を可能とするシステムを導入した。

以上により、SCE・Net のホームページの原型は、ほぼこの時期に出来上がった。これにかかった費用は、概ね 20 万円であった。

予算の関係から、「トピックス」のコーナーは SCE・Net メンバーで書き換え可能の方式としたが、その他公開情報の掲載は B L C 社に依頼する方式をとった。

なお、この改造と同時に、会員全員の I T リテラシー（パソコン、インターネットなど）の向上を図る活動を進めることも重要であることが指摘された。

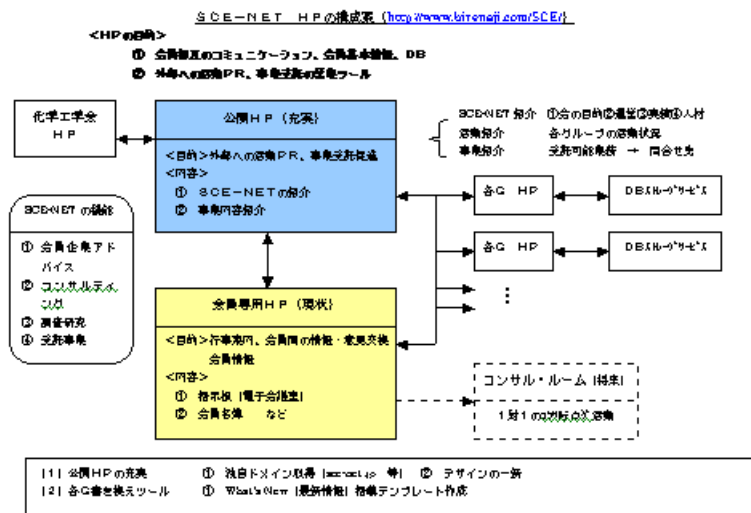
この改造と会員の I T リテラシーの向上により、SCE・Net の活動の活性化が図られたものとする。

4. 第 2 次改造（2003 年秋～2004 年春）

その後、SCE・Net の活動が活発化するに従い、更に外部への情報発信を強化する目的で改革推進委員会が 2003 年 7 月に立ち上げられ、ホームページもその有力なツールとして内容充実が議論された。この中で、ホームページは次のようなことを目指すこととしている。

「会の理念、行動目標、実績などを広報し、会員に会の状況を理解してもらうとともに、一般の方にも会に興味を持たせ、会員として参加・協力して戴き、多くの人により楽しい活動の場を提供し、充実した人生を過ごしてもらい、会の発展に寄与させる。」

図 6 ホームページ改造構想図



ホームページには、次の機能を持たせるものとし、特に②の外部への P R 機能の充実を図ることとした。

- ① 会員相互のコミュニケーションの場、基礎情報
 - … <現状> セキュリティ：高 技術的難易度：高
- ② 外部への活動 PR、受託事業の営業ツール
 - … <充実> セキュリティ：低 技術的難易度：低

改革推進委員会の討議を経て、2004 年春、ホームページの充実を図る改造が実施され、現在のホームページの構成がほぼ完成した。

この改造により、SCE・Net 各グループでのホームページへの掲載の自由度が上がり、活動紹介、成果報告などの充実が図られ、SCE・Net の認知度、存在感も大きく向上し、学会その他からの期待も高まったものとする。

5. おわりに

I T が急激に普及し始め、SCE・Net が立ち上げられた 2000 年前後のことを、インターネット、Eメール、携帯電話などが当たり前と言うよりは、むしろ必需品になってきている現在から改めて振り返ると、10 年の時間の“速さ”と“長さ”を同時に実感できた気がする。

理想に燃え、いろいろと工夫を凝らしたシステムを立ち上げたものの、ほとんど利用のない日々が続きイライラした思い出、これを解決するためにメンバーやベンダーである B L C 社と協議しながら改善を重ねていった SCE・Net のホームページの歴史は、I T の一般への普及の過程をそのままに表しているようにも思える。

現在、活発にこのホームページが活用されていることは大変喜ばしく思っているが、この開発の貴重な経験は、私にとっても一つの財産となっている。